

明珠

龍泉院
參禅会会報

従容録に学ぶ(一一)

第八二則 雲門声色

〔示衆〕

衆に示して云く、声色を断ぜざればこれ随処墮、
声をもって求め色をもって見れば、如来を見ず。
路に就いて家に帰る底、あることなしや。

〔本則〕

挙す、雲門衆に示すに云く、聞声悟道、(双丸、
耳を塞ぐ。)見色明心、(両葉、睛を遮ぎる。)観
世音菩薩、錢をもち来つて餠餅を買う、手を放下
すればかえつてこれ饅頭。(また風に別調の中に
吹かる。)

この則は、雲門さんで知られる雲門文偃が
教え示した一則です。『従容録』には雲門に
関する本則が八つもあり、全百則の中では最
も多い割合となっています。百則をえらんだ
宏智さんも、雲門の教えのすばらしさには、

雲門を



特別な関心を寄せていたことの証拠です。
雲門文偃(八六九〜九四七)は、唐末に蘇
州で生まれました。一七才で出家し、はじめ
は戒律を勉強し、のちに禅門の睦州和尚に参
じて悟りを開きました。さらに睦州のもとで
数年間修行ののち、福建省雪峰山の英傑、義
存禅師に師侍して大法を受け、広東省の靈樹
院に住しました。

その後、雲門山に道場を開いたのは、文偃
六〇才の時、以後約三〇年にわたって大い
に禅風を振り、常に千人の修行者が集ったと
いわれます。朝廷からは匡真大師と賜号を受
け、寺も大覚禅寺の勅額が下賜されました。
やがて雲門の宗風は、雲門宗という宗派に発
展し、北宋時代には禅界をリードしました。

雲門さんの禅風には多くの特色があります
が、とりわけ短かな一語一句で、ズバリと禅
の要旨を示す「一字関」がよく知られていま
す。たとえば、仏とは何かとの問いに「乾屎
橛」と答え、清浄法身を問えば「花葉欄」と

答えるたぐいです。

また、雲門の問答には法身ほうじんに関するものが多く、永遠の絶対的な真理を仏の本性とみる「法身」に對して、それにこだわり、どこおることを誠しめる厳しい禅風が示されています。このような雲門の禅風は、宋代以後の臨濟禅に大きな影響を与えています。

雲門宗は元代に絶えますが、関東省乳源県瑶族自治区にある雲門山大覚禅寺は、今日なお多くの伽藍と僧侶を擁して隆昌し、雲門さんの遺徳を千年後に伝えています。

さて、万松の「示衆」をみましょう。それは、人の感覺器官のはたらきそのままは自在無礙の仏なのであるから、感覺でもって仏を求めてもムダだ、この辺がちやんとわきまえられているかな、といったほどの意味です。

この「色」とは姿形のこと、「随処墮ずいじょだ」とは曹山本寂が唱えた「曹山三墮」といわれるものの一つで、知覚に徹し切った時の自由無礙のあり方をいいます。曹山さんについては、すでに第五二則「曹山法身」でご紹介してあります。

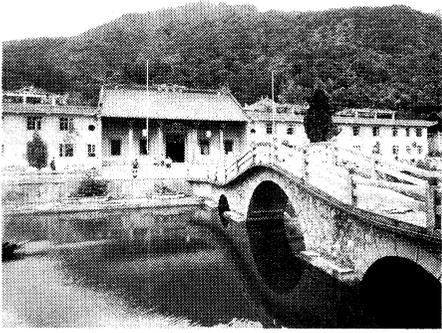
つぎに、「本則」はいたって短い代りに、内容はすこぶる深いも

のです。意識してみましよう。

「かの有名な香嚴や靈雲の聞声悟道や見色明心というものは、いつてみれば、観音さんが銭で餅を買って、手を放したら饅頭に変ってしまったようなもんじゃ。」

なんとすぐれた禅匠は、また面白いたとえて説くものですね。この辺が常人とはケタ外れにちがう、縦横に道を説きえる者の力量なのでしよう。聞声悟道もんじょうごどうと見色明心けんじきめいしんとは、ともに中唐の澹山靈祐の弟子である香嚴智閑と靈雲志勤、この両者による悟りの勝縁をいい、古来禅門で有名な故事とされます。

すなわち、香嚴は靈祐のもとでは悟れず、師に別れて遠く河南省南陽の郊外、白崖山にある慧忠国



雲門山大覚禅寺の雄姿

師の塔院を守っていました。ある日、庭を掃く筈に当たつた小石が竹を撃つ音を聞いた瞬間、忽然として心のむすぶれが解けました。

また、靈雲はある早春の朝、霞たなびく空にパツとほころびた桃の花を見て、大いなる悟りが開けました。湖南省のこのあたりは、桃の木が豊富なところですよ。

両者は、竹声と桃花という耳や目にうったえる知覚によって、大悟徹底の体験をえたのです。しかし、誰でもそうとはいきません。そこには、長く深い修行の苦しみや葛藤があったればこそでしょう。

いま、雲門がいつているのは、こんな両者の悟りについてではなく、直接的な機縁となつた目や耳のはたらきについてであります。知覚器官のはたらきが無心になされるすがたこそ、仏としての妙用なのだ、ということでありませぬ。

観音さまは三三に身を変じ、あるいは千本の手をさしのべて、自由自在に衆生済度をなされます。たくさん観音さまがあるのは、そのためです。その観音さまが餅を買って、手から放したとたんに饅頭になった。これは手品ではありませぬ。観音さまの自在無礙のはたらきをいつているのです。

つまり、雲門は、わたくしたち

の目や耳が天然自然に作用できるすばらしさを、あたかも観音さまの自在無礙の妙用にたとえて示されているのですね。

考えてみれば、感覺器官は人が生きる上で、もっとも基本的なはたらきです。それが不都合になるとどんなにショックであるか、いうまでもありません。わたくしなども、最近では視力の衰えるにしがたて、それを痛感します。若いころ、必要あって『全唐文』一千巻を「ナナメ読み」ながら、わずか三日で読んだことなど、もう遠い夢の夢です。

すると、万松がいつるように、感覺器官のスムーズなはたらきは、小さな自分だけのはからいではなく、大いなるものの力だということがわかります。これを仏といわずして、何といえるでしょう。本来の面目といつても同じであります。それなのに、わたくしたちは仏を目や耳で求める、それが根本的にまちがっているのは、万松のいわれるとおりですね。

坐禅も、坐れば足が痛い、それでよいのですね。痛いのも苦しいのも仏さまのはからいです。道元禅師が、身も心も放つて仏になげ入れれば、いとまたやすく仏となる、といわれているとおりです。



常真寺一泊参禅者一同 (H2.6.10)

常真寺での一泊参禅

平成二年六月九日、一〇日の両日、栃木県鹿沼市にあります常真寺で、一泊参禅を行いました。

一泊参禅は今回で第五回目となり、参加者は、椎名老師他二三名で、丁度梅雨入り第一日目をバスで目的地に向いました。途中から小雨となり、雨に濡れた木立ちの中、坂東観音第一七番札所である満願寺に詣で、そこで昼食をいただきました。

常真寺について驚きましたことは、山門の入口にかなりの樹齢と思われる榎の古木がそそり立ち、それに松が宿り木として枝をのばしておりました。常真寺での参禅の日課は次の差定により行なわれました。

第一日 六月九日(土)

上山 午後三時

講話 午後三時三〇分

皆川広義老師

坐禅 午後四時四〇分

晚課 午後五時三〇分

薬石 午後六時

入浴 午後七時

夜坐 午後七時五〇分

開枕 午後九時三〇分

第二日 六月一〇日(日)

振鈴 午前四時三〇分

暁天 午前五時

朝課 午前五時四〇分

作務 午前六時

小食 午前七時

坐禅 午前八時三〇分

禅講 午前九時三〇分

椎名宏雄老師

坐禅 午前一時四〇分

点心 午前一時三〇分

下山 午後〇時三〇分

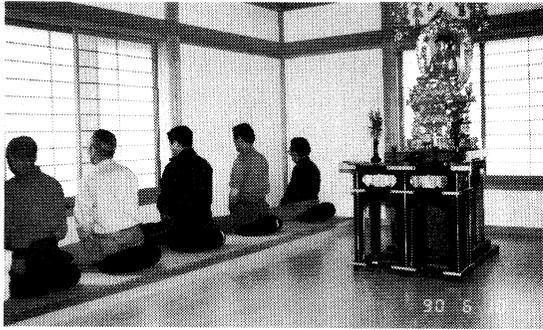
こうして一同、無事下山いたしました。降りしきる雨音を聞きながらの夜坐は、一同心を洗われる思いで、一心に坐れたように思えます。第一日目の皆川老師のご法話は釈尊の成道への道について、平易に、そして熱のこもったお話で、一同温い感動をいただきました。第二日目の椎名老師のご講話は、白隠禅師坐禅和讃をもとに、禅師の生涯にわたる布教活動の話され、最後に詩人八木重吉の詩、「花はなぜ美しいか、ひとすじの気持ちで咲いているからだ」で結ばれ、ひとすじに佛道を学ぶ大切さを示されました。

〔参加者〕

五十嵐嗣郎、石井つや、井之輪進、今泉章利、今泉房子、大塚マサ子、小畑節朗、加藤健之、佐藤初恵、沢村国勝、四宮清二、下村

忠男、杉浦上太郎、添田昌弘、染谷はる、高野千代子、寺田哲朗、藤原公、政安裕良、三町勲、宮田哲男、森岡俊雄、安本小太郎

(以上二十三名)



寂かな常真寺坐禅堂で

今回の参禅は、日頃より緑陰禅の集いをなされておられる皆川老師と、そのご家族により、手作りのぬくもりで一同を包んでいたように思えてなりません。改めて感謝申し上げます。奥様にはご多忙の中、私共のためにご用意いただきましたお食事のおいしかったこと、参禅者一同の大きな活力となりました。本当に有難うございました。

また今回の計画にご尽力いただきました樺名老師、小畑様、三町・添田両幹事、ならびに写真を担当いただきました藤原様に、心より感謝申し上げます。

随縁 — 一泊坐禅会に参加して

柏市 今泉 章利

今年の五月二十七日に、初めて龍泉院参禅会に参加させて頂いたばかりの私が、六月九日の一泊坐禅会に、家内といきなり参加する事をお許し頂きましたことを、御老師を始め皆様に心より感謝申し上げます。

もともと、仏教・坐禅等とは、殆どと言ってよいほど縁の薄かった私どもが、参禅会に参加させて頂くことになったいきさつは、昨年、風邪の床で何気なく私が「般若心経」を暗記したことに始まりました。私が病氣回復の日に、「般若心経」を誦んじてみせましたと、家内は密かに対抗意識を燃やしたらしく、いつの間にか、毎朝の仏壇に奇妙な調子の「般若心経」が聞こえて来るようになりました。今年の3月になると、家内から突然、駒沢大学の聴講生になって、「禅」を勉強したいと話がありました。

理由は、家内のライフワーク(?)として「茶道」の勉強をしていると、どうしても「禅」を理解しないと行き詰まるという事でした。私は、もともと、「茶道」が

あって「禅」があるのではなく、「禅」があって「茶道」があると思っておりましたので、茶碗の回し方ばかりを、真面目な顔つきで几帳面に認めてきた家内が、斯かる発言をしたのは、大変に良い事だと内心思ったものでした。

しかも、駒沢大学は、大学のゼミの同級生が助教授をしているし、小生の実家の菩提寺の先代、藤田俊訓住職が昔学監をされていたとも仄聞していたので、「無理のない範囲で」かつ「習ったことは独り占めにせず小生にも説明する事」という条件付きで同意したのでありました。

家内が駒沢大学で取った講座は、「禅特別講義—臨濟禅—」、「仏書解説—正法眼蔵—」等でありましたが、この禅特別講義の先生が椎名御老師であり、御老師より「柏に住んでいるなら、参禅会に来てはどうか。」とお誘いを受けたことが、一泊坐禅会参加までの経緯であります。

一泊坐禅会は、坐禅について何も知らないのです、始めは正直いつて不安でありました。然し、御老

師をはじめ小畑さん、幹事の添田さん、三町さん他皆様の、実に真摯でかつ暖かい空気につつまれて、あっと言う間に終わったと言うのが実感でした。

しかし、短かったとはいえ、静かな山間の常真寺での想い出は、誠に忘れ難いものがありました。六柱の坐禅の中で襲ってくる肉体的な苦痛には、本当に閉口しましたが、「足が折れるならそれもよし」と居直ってみたところ、痛みが洞徹した様な気も致しました。また、肉体の加減によって、一分間が、一分間にも感じる事があるのだと言う事も知りました。集中すれば、僅か一分間でも人は実に多くの事を成し得るのかもしれないとも考えるようになりました。

また、坐禅をしていると、実に多くの物音が聞こえて来ます。それは、本当に小さいけれども、確実に命の息吹であったり、大地を吹き抜ける風にそよぐ木々の葉の音であったりしました。そして、それらは、小生の目の前の障子の向こう側で行われている営みの音でした。

ところが、最後の六柱が終わった時、私はもう一つの発見をしたのでした。それは、隣の方が小生

の目の前の障子を、空気入替えの為に、ほんの少し開けて呉れたことによってもたらされたものでした。僅かな障子の隙間から見えたものは、六柱の間に私の心の中で展開していた景色とは似ても似つかぬものであり、小生は、目で見えるものは、人間が考えている程には、見えていないのだと言う事を教えられたのであります。

一 泊坐禅会から二か月が過ぎた今、この原稿を書きながら、もう一つの忘れ難い常真寺の皆川老師の講話を思い出しております。

それは、「人は永遠の命を永遠に伝えるために生まれてきており、人は命を伝えることによって永遠に生きる。」と言うことであります。人は、老いる事、そして死ぬ事を避けることは、どうしても出来ないにも拘わらず、その現実から目をそむけようとしている。然し、病人や老人や死に逝く人々は、自分たちの苦しみを通じて、我々にその真実を伝えてくれる方々なのだ」と言う事でした。

現在、現代人は、諸先輩が、大変な苦勞をして築いて呉れた「命を伝えるための手段」の利便性や快適さにすっかり目を奪われており、その「手段」を入手することが、目的になってしまっておりま

す。「人間の生命を伝え高めてゆくという一番大切な目的」を忘れていた現代人に対して、皆川老師の講話は、何と厳しい言葉であつたでしょうか。

小生は、恥ずかし乍ら、電車の中で席を取られる程度の事で、心が乱れるような凡夫であります。一泊坐禅会で学んだ事を大切にしながら、参禅会でさらに多くの事を勉強してゆきたいと願っております。今後とも、家内共々宜しくお願い申し上げます。



常真寺本堂正面

常真禅寺にて

船橋市 加藤 健之

老杉に 雨休みたり

思惟埋むゆ

悟りとして 有無の超越^お

紫欄咲く

参禅愚感

船橋市 森岡 俊雄

毎年一回、龍泉院参禅会の合宿が行われる。私も病気でない限り参加させて載っている。私も馬齢を加えて、今年で七十二才で、社会的に見てもはや一人前ではない。

それで上山、参禅、下山の事は参禅会諸賢に御願して、足掛け一五年の参禅の現実を書かせて戴きます。随分わからない事を御師家様に申し上げます。先ず六年だの九年だのと腹が立つ。私は五〇余年刀鍛冶をやっても未だ出来な

い。大和尚笑って居られたが、之は天に向って唾するのと同じで、自分の顔に掛かって来ます。達磨大師の偈の一節に「伝法救述情」とあります。之は先輩に教えて貰いました。達磨大師の

庭茂り 而今現成 又坐る

梅雨止みて 連策響き

我は今

放禅に 夜来の梅雨止み

脚いとう

当時でもお寺はたくさんあり、坊様も大勢居た時の話です。何の法でも同じでしょうが、正法は無く、少しずれた形であるものでしょう。

佛法の事は判りませんが、鍛冶の事は少し判ります。数学の岡潔博士の話に、数学が判るか判らぬかは、零が判るか判らぬかにあると。零は数学の原点でしょう。何の仕事もそうですが、原点が判り、それを具現化出来たらすばらしい。努力はしてませんが、私には出来ません。それにつけても弟子が判る迄笑って待つ。実に大和尚はすばらしい。すぐに教えたのでは、教えが教えになりません。以上を以て愚工の拙文と致します。

単身赴任生活素描

柏市 五十嵐嗣郎

名古屋へ単身赴任し、この六月で一年半が過ぎました。単身赴任者は全国で三〇万人程いるらしく、私の近くのスーパーでも、七時の閉店間際に背広姿の買物客が飛込んで来るのをよく見かけます。

単身赴任は仕事や家庭の事で、とかく暗く考えがちになります。「何故俺だけが、こんな損な役に合うのか」「今さら炊事・洗濯はたまらない」「父親不在で、子供の教育や家族は大丈夫か」などの思いが常に湧き出て来ます。このため、最近、単身赴任者の多い札幌などでは、単身赴任者向けの雑誌や会合などがもたれており、互いの交流を深めながら、単身生活を前向きに取組むように努めている組織もあるようです。

私も現実の生活を否定することはできないし、全面的に受止めなければならぬと思います。即ち「私でも期待され、必要としている人達がいるなら、それに報いなければならぬ」「他はこれ吾にあらず、苦勞は買ってでもしよう」と頭で理解して、何とか前向きに前進しようと努めています。また

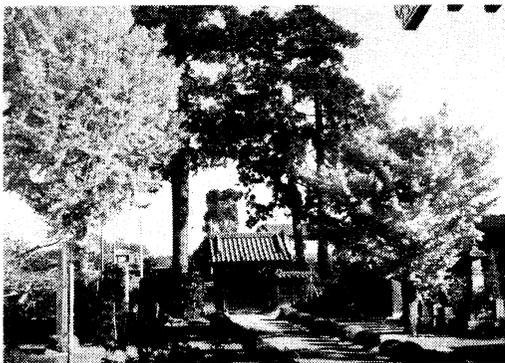
休日には、積極的にテニスや山行で汗を流すと共に、新しいコミュニケーションションづくりにも心掛けています。

しかし、それでも仕事のストレスやさびしさから来る不安感に襲われることはしばしばで、つい辛い気持ちを癒すために坐ろうとします。いわゆる「為坐禪」に陥ってしまうのです。「本来、無所得・無所悟の坐禪であるはずだ」ということは、ご老師より折にふれお聞きしているものの、一時のわずらわしさから逃れたい、本来の自己を取り戻したい、頭をすっきりさせて新しいアイデアを出したい、等を期待して坐ってしまうのです。

只管打坐、ただ坐る。悟りを求めても特別の悟りなんてありません。そういうものを求めること自体、欲と首っ引きになっていることは知識として理解している積りです。でも、坐る時に心のどこかには何かを求めているのです。このようなダメ坐禪を、高間様より頂戴した文殊菩薩（今年の成道会に開眼予定の聖像）の写真を前に一年半繰り返し、なんとか単

身赴任生活を乗り切ってきました。そこで、この頃ようやく分かった事ですが、毎月の参禅会で、ご老師より正法眼蔵によるご提唱を頂き、人生の生き方について新しい知識を得ることが出来ます。しかし、知識はあくまでも知識であって智慧とは異なります。知識を智慧にするためには、実践を通す必要があるという事です。参禅会のご老師の提唱された知識の積み重ねが、私の心の中で、ダメ坐禪でも行じる事で、少しでも智慧に発酵しているのではないかと密かに思っているのです。

私も参禅会に入会してもう六年



秋深き龍泉院境内

ほどになり、大変生意気にも次のような事をよく感じる時があります。参禅会の皆様は、入会時より二〜三年すると、もの腰や発言内容が何か違って来て、人生の重みみたいなものを増しているように思えて来ます。これは坐る経験のなせる術ではないかと思えます。即ち、坐禪の功德と呼ばれるものかも知れません。

私もこれからは、ダメな為坐禪を少しでも本来の坐禪に近づくよう、捉われのない気持で坐ることを心掛け、目指すは「身心脱落」です。それが現在の避けようのない単身赴任生活が真実の世界と受けとめ、一日一日を大切に生きて行くことにつながるものと思えます。

聖語抄

それ修証はひとつにあらざともえる、すなわち外道の見なり。仏法には修証これ一平等なり。いまも証上の修なるゆえに、初心の弁道すなわち本証の全体なり。かるがゆえに、修行の用心をささずるにも、修のほか証をまつおもいなかれとおしう。直指の本証なるがゆえなるべし。すでに修の証なれば証にきわなく、証の修なれば修にはじめなし。（弁道話）

無神論者の坐禅

船橋市 政安 裕良

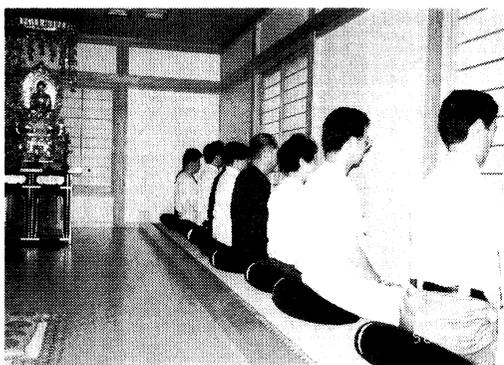
今から四、五年前の夏、上期賞
与の支給事務も終わって、丁度暇
が出来たので、前から友人に聞いて
いた、会社から地下鉄で一駅、
門前仲町の「寒光寺」の昼の坐禅
会に、会社をサボッテ出席させて
頂いた。ご住職は現在建長寺の管
長をなさっておられるとかの、吉
田正道師であるが、坐禅、提唱後、
帰りに、玄関に置いてあった、機
関紙「円覚」を拝受して帰ってか
ら、読んでみて、ビックリした。

其の記事の中の、円覚寺塔頭
「続灯庵」庵主須原耕雲師の記事
に、戦争や遠隔地への就職で、長
い間会いたい会いたいと思いが
ら、消息の判らなかつた、中学時代
の恩師、岡村一良先生のご消息が、
サラリと書いてあったのである。

狂喜して須原師にお手紙を出す
と、折り返しお便りが有り、夫人
が御健在なこと、そして「続灯庵」
に分骨の有ること迄判った。そし
て後から考えて見ると、須原師は
あの頃、岡村先生と共に、只黙々
と学校の和室で、坐禅をやってお
られた、あの弓道の先生であるこ
とを思い出した。

戦争とは惨いものである。大正
二桁代の健康な男子は、軍の消耗
品であった。しかし勝つ事と、我
が同胞を守る為に、死を覚悟して
海軍予備学生に応募して、軍籍に
入った者に、敗戦により残された
ものは、これから何うやって食っ
て行くか、今後どうすれば良いの
か？只我武者羅に生きて行くこと
だけしか無かつた。

昭和一三年、兄が上海の近くで
戦死してから、当時一四才の少年



六柱をがんばりました

は、死と云うことを真剣に考え始
めたようで、それから、クラスの
成績が後ろから数えた方が早かつ
た少年が、四年生になって、一挙
に二百数十人中のトップに踊り出
て、毎朝何も言わずに、和室で坐
禅を組んでおられた、漢文の岡村
先生（ニックネームはトンカチ、
東大法学部出身）の横で、慣れな
い坐禅を組むようになった。

敗戦、大学への復帰と共に、一、
三回駒沢大学の坐禅堂に通い、沢
木興道師や鈴木大拙師の著書を齧っ
た事もあったが、その後北海道へ
の転勤其の他で、禅等と云うもの
からは、程遠い生活の連続となっ
た。

昭和五四、五年頃から、先輩の
紹介もあり、何となく毎日曜日、
谷中の「全生庵」に通うようになっ
た。三、四年坐ったかどうか？総
理の中曾根氏が来られ様になり、
又交通渋滞が激しくなってきた、
家からの往復時間が掛かり過ぎる
為、何時の間にかこれも止めてし
まった。

その後住所の近くで、坐禅会を
行っている所は無いかと、色々と
捜した結果、昨年九月から、松戸
の某臨済系の寺に御世話になる様
になり、又其処で知り合つた某氏
から、「龍泉院」で椎名師の「正

法眼蔵」のご提唱のある事を伺い、
本年一月から龍泉院に参禅させて
戴いている次第です。

神とは何か、仏とは何か、宗教
とは何か？

「全生庵」に通っていた頃には、
随分思い悩んだものである。中野
の高歩院に大森曹玄師を、白山の
龍雲院に小池心叟師を、上野の宋
雲院に福富雪底師（現大徳寺派管
長）を訪ね、山本玄峰師の『無門
関提唱』を読み、平井玄恭師の
『臨済録』提唱を聴き、果ては
『歎異抄』を紐解き、山岡鉄舟師
（全生庵の建立者）に心酔し、又
毎年行われる、曹洞宗と臨済宗の
「禅をきく会」に参加し、「何かが
有るのだ」と思いつつも、大勇猛
心、大疑団、大信心の無い者には、
全てが生半可で、只管打坐と言ひ、
見性と言うが、果たしてこの様に
坐わる事が何なのか？未だに判ら
ないのが、現実である。

元検事総長の故伊藤栄樹氏の
「人は死ねばゴミになる」とは、
蓋し名言であるとも思うし、別に
死後、地獄や極楽が有ると思え
ないし、輪廻転生も信じ難い。

然し、しかし、しかし……？
こうやって坐禅をやっている事
は、「二重人格者だからだ」と批
評する人もいる。

毎年新入社員、七、八〇名に坐禅の意義を、自分ながらの解釈で事前説明をして、全生庵に引率し、平井玄恭師の法話を聞かせ、坐禅を体験させているが、彼等の感想は、「一度やって見たかった」「足が痛くて二度とやる気はしない」「もう一度一人で行って見たい」というような感想に分れる。

先般の常真寺の坐禅会では、皆川広義師の「悲、智、慈」と題する、釈迦のお話の中で、特に印象に残ったのは、「両親の生まれる前の自己を見る」と云う、お話であった。一休禅師だったろうか、やはり同じ様な意味の、句か和歌



小川の流れと小鳥の声の中で

が有った様な気がする。現在椎名師のご提唱にある「有時」の精神にも、何か通じるものの有る様な気がしてきた。何かが判ったような、判らない様な気持ちである。

ともかく、自分なりに、良い経験を見せて頂いたが、一体其れが何なのか？ 心の安らぎなのだろうか？ 果たして「悟り」とか「見性」と云うものが有るものなのか？

自分は十牛図の何処に居るのか？ 「尋牛」か「見跡」位にはいるのだろうか？ 自分の様な無神論者に、坐禅をやる資格が有るのだろうか？

行ったり、来たり、迷ったり、

の今日この頃である。「鉄は熱い中に鍛えよ」人生回顧して慙愧のみ多く、「信」が果たして得られるのか？

毎月椎名老師の口宣くげんされる、正法眼蔵或いは坐禅儀等のお言葉は、一々心に滲み互ってくる。

・諸縁を放捨し万事休息すべし
・身の結跏趺坐すべし、心の結跏趺坐すべし、身心脱落の結跏趺坐すべし

・仏道を行ずる者は先ず、須く仏道を信ずべし
・初心の弁道は本証の全体なり
・所謂仏徒の為体は宗説行一等等

り 又廊下に何げなく置いてある、曹洞宗発行の諸資料を拝見してゆ

初夏の聞法

以前からの習慣で、目覚し代りにラジオが鳴り出し、「人生読本」を聞くともなく耳にして、床から抜け出してあります。一〇年以上は前の放送の淡い記憶ですが、とある禅僧が（年配の老師様だったと思います）修行時代を偲んで、「先輩僧に叩かれた（これも警策

くと、今まで霧の中であった宗教上の慣行、作法等の意味合い等が次第に判って来る様な気がして来た。我が部屋に有る

「隨處 作 主 立 處 皆 真」

の域に達したきものである。

然し、孔子でさえ、「未だ生を知らず、何んぞ死を知らんや」と言っている。山岡鉄舟居士の坐禅、

惠林寺の快川和尚の立正を崇敬し、「人間の価値は臨終に決まる。不様な死に方だけはしたくない」と念願している、今日この頃である。

日常の努力の姿のみが、人生と云うものなのであろうか？

今後とも、ひたすら大方のご叱責とご指導を乞い願うのみである。

船橋市 加藤 健之

なのか挙骨なのか忘却）のが有難く嬉しく涙が出た」ことを話されたことが心に残っております。とはいえ、叩かれて嬉しいということが得心出来ぬままの心象記憶でした。

毎年五月と十一月に永平寺東京別院長谷寺で眼蔵会が催されるこ

とは、久参の小畑さんより聞いておりましたが、世俗的な遊びのスケジュールの方を先立たせてしまいい、聞法の機会を失なっています。大怪我という佛縁を頂いて、精神修養とは全然関係のない坐禅の道に気付かされて頂きました。今年早くから五月一日から五日には公私共に大きな行事は持たぬ様に安排して、眼蔵会に臨むことが出来ないました。

今回は七一回目の会とのこと、澤木老師が一七回御提唱された後を、酒井老師が嗣がれて続いておられるとのことです。回が進んでおられますので、馴染みの少ない、四禅比丘、一百八法明門、八大入覚の予定に進められました。いつも凡夫の説似一物即不中で聞法の紹介を逃げてはいけませんので、如是我聞の範囲で書いてみます。

開講式の時にしみじみと思い至りましたが、五体投地、合掌等々の寺院での作法について、常日頃から良い躰けを椎名老師に頂いておられます。血脈会、接心会等で、龍泉院を出ての行事にもまごつくことなく、心静かに従って行けるのは真実有難いことでした。

酒井老師のぐいぐいと心をひきつける語り口と、時折混ざる毒舌

はご健在そのものでした。悟った、悟ったとの陶醉感を三昧と誤ってはいかんぞ、バカモノ。「何度も出て来るバカモノです。そして数回に一度「バカモノはいかんかな、お脳の弱いお方と言ひ直そう。」と仰っしゃいます。百名前後の僧俗がどっと湧くひと時です。

「価値観を誤った異常な精神状態、小児性から来るのぼせ状態に陥ってはならない」ことを、表現を変え、お言葉を選んで説いて頂きました。バカモノが唯々有難く受けとめられ、その時に冒頭の「先輩僧に叩かれ有難く、嬉しく涙が出た」お坊様の心の中が納得出来ました。ともすれば坐禅を思考エリートのものとして受取り勝ちになる我身心を想い起させて頂き、つい先達って反省したばかりだからもうバカモノと言わんで下さいとの驕った気持を生ずる暇も無い程、佛道を歩まんとする者に對する慈愛に満ちた説法でした。

極く自然に坐りたくなり、坐らずにはおれなくなるお方も頂きました。「解脱は得るものではないぞ、行ずるものだ。正身端坐して我を佛にお預けするのが行じゃ、そして「平常心是道、あれにやあがっかりしたけど、あれしかないな」、このお言葉の大きさ、深さ

に浸り切ることが小生にとつての法悦です。

四禅比丘の書誌学的位置付け等のお話しも有りましたが、つたない表現力で書き進めると言語を奪われる一方になり、聞法の有難さ、お慈悲を充分お伝え出来るか心許なくなっています。

永平寺東京別院には、若い修行僧の方達が生活しております。その人々が眼蔵会の会場を整えたりお茶を馳走して下さいますが、ご講義が始まると、廊下に並べた机について聞法をしておられます。数分しますと酒井老師の大音声か響きます。「こらあつ、遠慮して



応量器の扱いに真険な手さばき

らんで中で聞いた方が良く聞えるだろう。さあ、入れ入れ」五日間繰り返された風光です。老師はもとより、修行僧の方達にも手を合わせずにはおられませんでした。

初夏の眼蔵会のひとこまでです。如是我聞の部分にすら、私の酔やらのぼせが混じっておるかも知れません。

佛教界に於ても色々な新しい流れがありますが、「模象に習って真童を恠しむこと勿れ」(普勸坐禅儀)といい、「積尊に還れ」と強く御説下されたのが道元禪師様その人であることを思い、どっぷりと回光返照の退歩の中に身を置きたいと祈念して止みません。

成道会のご案内

龍泉院第八回成道会

日時 二月九日(日)午前九時

内容 坐禅・法要・法活・点心
積尊の成道を讃え、本年も成道会を奉行了します。皆さま待望の聖僧文殊菩薩のお像も、完成ま近です。成道会には開光供養も行う予定です。会員の皆さまにはふるってご参会くださいますよう、ご案内申し上げます。

龍泉院参禅会簡介

一、日時 毎月第四日曜午前九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）

一、坐禅 止 静鐘 三声 坐禅

經行鐘 二声 經行

放禅鐘 一声 放禅

一、講義 木版三通 開經偈を唱えて『正法眼蔵』の提唱を聞く

講師 龍泉院住職椎名宏雄老師

平成二年五月より「有時」の巻を提唱中

一、座談 自己紹介の後、茶を喫し座談

正午解散

一、参加資格 年令、性別を問わず、どなたでも参加できます。

一、会費 無料

一、成道会坐禅

月例参禅会の他に毎年二月の第一あるいは第二日曜。（本年は二月九日）

釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要の後、法話を聴聞、点心（昼食）を共にする。

沼南雜記

〔参禅会記録〕（ ）内は座談の司会者

平成二年

四月二二日 二七名

（徳山 浩）

初心者への坐法の指導を行う。又、恒例により裏山にて「筍堀り」。

五月二七日 三二名

（四ノ宮清二）

六月九日〜十日

一泊参禅 二三名

於 栃木県鹿沼市 常眞寺

幹事 三町 勲

添田昌弘

写真 藤原 公

六月二四日 二六名

（今泉章利）

七月二二日 二四名

（宮本 茂）

八月二六日 二一名

（下村忠男）

九月三十日 二四名

（政安裕良）

▼常眞寺での一泊参禅は、先にご紹介のとおり、緑雨に身も心も洗われるばかりの時を過した。皆川老師の法話は二時間に渉る老師の全身全霊を傾けたものであり、高野千代子さんが特に厳しかった今

年の猛暑の中、一カ月を掛けてテープ起しをして下さった。この労作を『明珠』第二二号の付録として、今、お届けする次第であります。

▼道元禪師の『典座教訓』の中に「世尊二十年の遺恩、児孫を蓋覆す。白毫光一分の功德、受用不尽」と。然れば即ち「但衆に奉するを知って、貧を憂うべからず。若し有限の心無くんば、自ら無窮の福有らん」と。お釈迦さまは百歳ある寿命を縮めて八〇歳で入滅され、残る二〇年を我ら末世の仏弟子に施された。と言うのである。これは出家者に示されたものであろうが、決して在家にとっても無縁のものではない。自分の所有するものとは三衣一鉢、世尊八〇歳の路傍の死が、佛教を信じるもの全身を支えているのである。坐のベイスにあるこの大事を、皆川老師はわれわれにお示し下さった。

▼常眞寺の坐禅堂の傍らには小川が流れている。坐中には微かに水音が聞える。障子を開けると満目青田が広がる。単を畳の厚さだけの高さにして両側に分け、中央には聖僧様に代り、大恩教主釈迦牟尼佛が道場主としておられる。坐禅堂と廊下の結界は清々しい障子。日常性の中に坐禅が生きている小宇宙であった。（節光記）